＜実践例　３＞　第３学年　　平成３０年１０月　　（武　田　優　実）

１．単元名　　俳句を批評しよう
～表現に着目して評価する～　　（７時間）

２．単元の概要

本単元は、「文章の論理や展開の仕方，場面や登場人物の設定の仕方をとらえ内容の理解に役立てること」（「読むこと」イ）ならびに「文章を読み比べるなどして，構成や展開，表現の仕方について評価すること」（「読むこと」ウ）に重点を置き、生徒の実態に沿って具現化したものである。

本学級の生徒は、授業開きの単元で「『批評』の言葉をためる」（竹田青嗣）を読み、他者に自分の考えを理解してもらうために、国語の授業の中で批評にかかわる言葉を増やしていこうとする意欲をもっていた。また、前単元では、『おくのほそ道』のそれぞれの章段に描かれた作者の心情を、「歴史的事実」や「対比構造」などの観点を自分で設定しながら読み、章段同士の共通点を見いだして『おくのほそ道』に表れている芭蕉のものの見方や考え方を捉えるという学習を行った。

本単元では、その学習経験を生かし、様々な事柄を限られた字数で表現している俳句を読んだ。俳句に詠まれた内容や背景を、表現の仕方を根拠に解釈して理解し、観点を明確にして分析することでその俳句のよさや特性について評価するという言語活動を設定した。

単元の評価規準を、以下のように設定した。

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
①俳句を表現の仕方に着目して読み、その表現が俳句全体に与える効果や読者に与える効果を捉えようとしている。	①俳句の中における語句の使い方や表現上の工夫を捉え、内容の理解に役立てている。（イ） ②俳句の表現の仕方に着目し、評価している。（ウ）	①和語・漢語・外来語などの使い分けに注意し、語感を磨き語彙を豊かにしている。（（１）イ（ｲ））

授業者は、批評した内容がまとめられた文章を読み、印象のメモからどんな変容がみられたか、またワークシートに書きためられた解釈の切り口や批評の観点がどう関わっているかを個別的・具体的に捉えて、評価した。

また、指導と評価の計画は以下の通りである。

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法
1	学習の見通しをもつ。		**〔国語への関心・意欲・態度〕①** 観察 ワークシート
	○「『批評』の言葉をためる」と「おくのほそ道」の学習を振り返る。【全体】	・観点を立てて文学を読むという読み方を想起させるために、また、批評する言葉を本単元でもためることを意識させるために、二つの単元の振り返りを導入とする。	
	印象に残る俳句を集める。		
	○印象に残った俳句を複数選び、選んだ理由やもった印象をメモする。【個】	・俳句が掲載されている図書室の書籍を使い、多くの俳句に触れられるようにする。	

2・3	「俳句を味わう」で取り上げられている句を用いて、解釈するための切り口を見付ける。		
	○教科書の俳句を音読し、解釈したい一句を九句の中から選ぶ。【個】 ○表現の仕方を切り口にして解釈する。【個】	・読者への効果を意識させるために九句から一句を選んだ理由ともった印象を説明させる。 ・「俳句の可能性」を用いて、俳句の基礎知識と、「何によってどう読めるか」または「こう読めるのは何によってか」に相当する解釈の切り口となる語句を整理、確認させる。 ・解釈の切り口を他者と比較したり解釈の妥当性を判断したりするために、同じ俳句を選んだ生徒同士で交流する時間を設ける。	
	○解釈を共有し、解釈の切り口としたことをまとめる。【全体】	・解釈や、そのための切り口についての見方を広くするために、発表を受けて質問や意見を出す時間を設ける。	
4	印象に残った俳句を解釈する。		
	○前時までに見付けた、解釈の切り口となる表現の仕方を用いて、第１時に自分が集めた俳句を解釈する。【全体】	・前時に生徒が見付けた解釈の切り口の例を示す。 《解釈の切り口にする表現の仕方の例》 反復、省略、語調、韻、リズム、表記、比喩、切れ字、色彩語、象徴語、情景、対比、強調、断定　など	
	○批評したい俳句を決める。【個】	・俳句を選ぶ際は、感じたよさや特性を他者に理解してもらうという批評がもつ意義を全体で確認し、感じた度合いを選ぶ基準にさせる。	**〔読む能力〕①** 観察、ノート
5・6本時	印象に残った俳句を批評する。		
	○自分が選んだ複数の俳句を比較して読みながら、観点を立てる。【個】 ○比較することで見えた、選んだ俳句のよさや特性についての自分の考えをもつ。	・比較するための観点について知るために、また、よさや特性を言語化するために、教科書 p173「観点を立てて分析する」並びに p174「説得力のある文章を書こう」を参考にさせる。	
	自分で選んだ俳句に見いだしたよさや特性について吟味する。		**〔読む能力〕②** 観察 ノート
	○他の生徒が、選んだ俳句に見出したよさや特性と、その根拠を知る。【個】	・前時で生徒一人一人が選んだ俳句に見いだしたよさや特性を記述したものを、全員分コピーして配付する。	
	○交流して、自分で選んだ俳	・よさや特性について適切に論じるために、そう価値付ける根拠となった表現と解釈を述	

	句に見いだしたよさや特性について再考する。 【自由交流】 ○本時を振り返り、批評した内容をまとめるために必要な情報を整理する。【個】	べさせる。 ・本時の学習で得たことをワークシートに書きためさせる。また、次時に文章にまとめる上で有用な情報を整理させる。	
7	自分で選んだ俳句について批評したことをまとめる。 ○自分で選んだ俳句について批評したことを文章にまとめる。【個】 ○単元を通じて、俳句の読み方について考えたことを振り返る。【個】	・選んだ俳句に対する自分の評価が他者に伝わるように、前時に整理した情報を用いて記述させる。 ・得られた俳句の読み方を自覚させるために、第１時にもっていた印象と第７時に書いた批評の文章とを比較させる。	**〔読む能力〕②** ワークシート

３．指導にあたって

（１）本単元で目指す生徒像

表現の仕方に着目して読み、その表現が俳句全体に与える効果や読者に与える効果について自分の考えをもつことができる生徒。

（２）重視した資質・能力と、発揮させるための手立て

本単元で重視して育てる資質・能力は、「場に応じて判断基準をつくる力」と「学びを評価し、課題を見付ける力」であった。それを発揮させるための手立ては以下の通りである。

単元を印象・解釈・批評という段階に分けて構成した。その中で、他者と交流しながら、自分とは異なる印象や読み方があることに気付いたり、一句を様々な切り口から解釈したりする場面（第３・４時）を設定した。その上で、自分の印象に残った俳句のよさや特性を見いだす活動（第５・６時）を設定した。このことで、生徒が主体的に問いや学習課題をたてて思考・判断・表現を繰り返すことにつながると考えた。また、単元の流れに従って印象、解釈、批評という段階に分けて記述できるワークシートに、学習活動を通して得た読み方や理解した内容を書きためていったものを、単元の振り返りとして用いた。主観による印象や感想だったものが、よさや特性の分析的な検討を経て、最終的に客観性のある批評となり、その文章を比較することで読みが深まっていった過程を自覚できると考えた。

本単元での学びを生かして、今後語句の使い方や表現上の工夫に着目して、文学的文章の内容の理解に役立てたり、韻文や語句の奥深さを味わったりできる生徒にしたいと考えた。

４．本時の学習活動（５／７）

（１）目標

俳句の表現の仕方を根拠に、俳句のよさや特性について評価することができる。

（２）展開

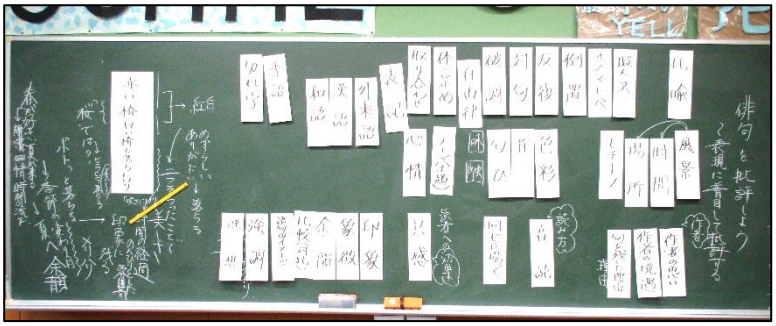
学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法
課題　自分が選んだ俳句のよさや特性について吟味しよう。		
1　本時の課題と流れを確認する。　【全体】	・自分が選んだ俳句の価値に対する考えを広げたり深めたりするために、他者がもつ観点や解釈と比較することを促す。	評価場面 〈評価規準〉 〔読む能力〕② 〈評価方法〉 ・交流の様子の観察 ・ノートの記述 〈Ｂの生徒の姿〉 ・俳句の表現の仕方を根拠に、俳句のよさや特性について評価している。 〈Ｃの生徒への手立て〉 ・自分が選んだ俳句にもった印象と選んだ理由に立ち返らせ、その根拠となる表現を探させる。また、他の生徒と交流する中で触れた観点やよさや特性を用いて、自分が選んだ俳句を読ませる。
2　他の生徒が、選んだ俳句に見いだしたよさや特性と、その根拠を知る。【個】	・前時で生徒一人一人が選んだ俳句に見いだしたよさや特性を記述したものを、全員分コピーして配付する。	
3　交流して、自分が選んだ俳句に見いだしたよさや特性について再考する。　【自由交流】	・よさや特性について適切に論じるために、そう価値付ける根拠となった表現と解釈を述べさせる。 ・交流の思考の方法として、同じ観点をもつ人がどう価値付けたかを知ること、同じ価値付けをしている人がどういう観点をもっているかを知ること、自分になかった見方を自分が選んだ俳句に生かすことを、複数の俳句を取り上げて示す。	
4　本時を振り返り、批評した内容をまとめるために必要な情報を整理する。　【個】	・本時の中で増えたり更新されたり変容したりしたことをワークシートに書きためさせる。また、次時に文章にまとめる上で、感じたよさや特性を他者に理解させるために情報が十分であるか、あるいは情報が過多ではないかを判断させる。	

５．授業を終えて

実践を通しての成果（○）と課題（▲）は以下の通りである。

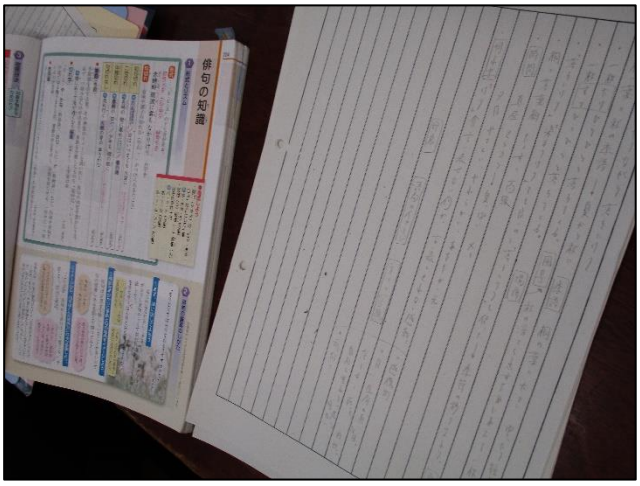
▲【単元構成】印象→解釈→批評というスモールステップを踏み、教師側の都合のレールに乗せたことにより、学習者の思考が一方向にしか進まず、思考の行き来を限定してしまった。さらに、全員が完了するまでに同じ活動を強いることで、時間も間延びし、ある生徒にとっては不要な時間を取らせたり活動を行わせたりした。まず生徒に俳句の批評をさせることで、生徒一人一人が見通しを立てて、必要に応じて自由に思考できる単元構成や指示が必要であった。

▲【授業者の手立て】観点を授業者が整理せずに提示していったため、混乱した生徒や汎用性のある力として捉えることができなかった生徒がおり、考えさせる場面と教える場面との具体的な想定のもと単元を組む必要があった。同じく、授業者が整理しきれなかったこととして交流の持ち方が反省である。一人一人が選んだ俳句を教材としているために、交流の目的、交流の際の観点が共有できないまま時間を強いることとなった。これらによって、「批評」ではなく、「解釈」「鑑賞」にとどまった生徒が多くいた。分析の観点と比較の観点とを区別することや生徒が挙げた観点や気付きを取り上げて整理したり系統立てたりすることなど、各自が必要に応じて交流できるような方法をとる手立てが必要であった。

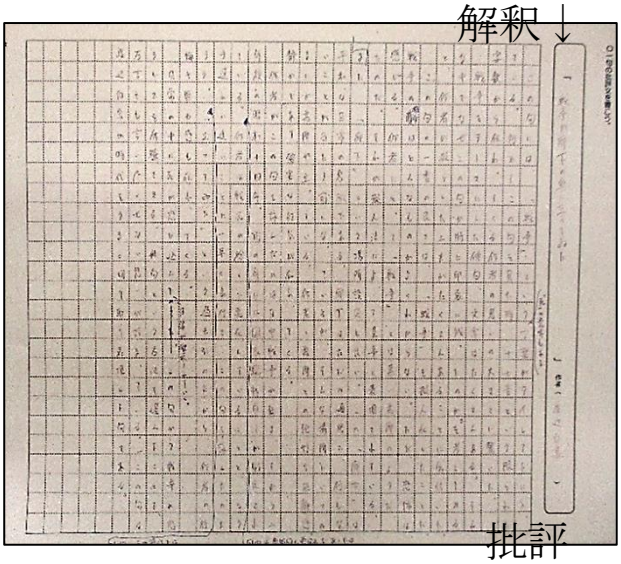


印象↓

○【言語活動】年間の読むことを通して、「批評する」言語活動を位置づけ、根拠に基づいて物事を評価する目を養おうとした。本単元においても、批評したい俳句を自分で選んだこと、「なんとなく」直感的なものを「批評の目」となるいろいろな切り口から分析したことによって、文学的文章の読み方を身に付けた実感をもつ生徒が多く見られた。また、解釈の多様性に対するおもしろさや、作者の意図の緻密さ、一語一句のもつ奥深さなどを味わい楽しむ生徒がおり、自分の選んだ俳句だけでなく、俳句そのものの特性に気付く生徒が見られたのは成果である。



解釈↓



批評

○【年間カリキュラム】前述したように、前単元では「おくのほそ道」の読解を「切り口」を自分で設定して読んだことで読み方を生かすことにつながった。また、この後の単元では、俳句の創作を行い、生徒が作者として語句選択をすることで、俳句のもつおもしろさや難しさを生徒が再確認することができた。